

がんのリハビリテーションマニュアル 周術期から緩和ケアまで

辻 哲也 編

＜書評者＞ 水間正澄（昭和大学教授・リハビリテーション医学）

がんのリハビリテーションは、従来からリハビリテーション医学の1つの領域として、リハビリテーション科専門医の所属している施設では地道な活動がなされていたが、必ずしも欧米でみられるような専門の診療部門として運営されていたわけではなかった。特に、がん治療を専門とする病院においてはリハビリテーション科専門医が専従として勤務することも少なく、積極的なリハビリテーションアプローチが展開されていたとは言い難い。

本書を編集された辻 哲也氏は、2002年に開院した高度がん専門医療機関である静岡県立静岡がんセンターにおいて、わが国におけるがんリハビリテーション専門の診療部門としての先駆的な取り組みを開始された。その後、2006年には「がん対策基本法」が施行され、がんの予防、早期発見、研究推進とともに医療の質として患者のQOLの維持向上も求めら

れ、リハビリテーションの役割も重視されるようになった。さらに、2010年度診療報酬改定では「がん患者リハビリテーション料」が新設され、その施設要件の1つとして多職種チームによる研修会受講も必須のものとなった。これを機にがん拠点病院のみならず一般病院においてもがんのリハビリテーションの必要性が認識され、多くの施設が研修会を受講し、施設認可を受けて本格的な取り組みを始めたところである。このような経緯の中、本書ががんのリハビリテーションの実践的な入門書として出版されたことは大変意義深い。

本書は辻氏をはじめとする執筆陣の豊富な臨床経験を基に書きあげられ、「周術期から緩和ケアまで」との副題が示す通り、がん患者診療におけるさまざまな場面でのリハビリテーションの必要性とかわり方を取り上げている。その内容は、がん医療全般に始まり、

がんそのものにより引き起こされる障害、手術・化学療法・放射線治療などの治療過程に起こり得るさまざまな障害と生活機能の低下への対応、さらには精神心理面へのサポートと多岐にわたる。がんにより引き起こされる障害も、運動障害、切断、摂食・嚥下障害、浮腫、呼吸障害、骨折、疼痛、さらにはこころのケアまで多種多様であるが、項目ごとにポイントがまとめられ、豊富な写真や図表を用いて包括的なリハビリテーションアプローチの実践がわかりやすく示されている。臨床現場ですぐに役に立つ実践書であるが、がんのリハビリテーション研修会などの受講に際しての学習にも活用されることをお勧めしたい。

本書を通じてより多くの医療人ががんのリハビリテーションの役割と必要性を理解され、がん医療全体の質の向上につながることを期待している。

●B5 頁368 2011年
定価4,830円
(本体4,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-01129-7]
医学書院刊